

「辛抱する木に金が成る」



米山中2年
後藤海歩
令和3年度民謡民舞少女(中学生の部)全国大会出場

「楽 楽しく歌うことが一番の目標だったので、全国大会に出場できたことは信じられない気持ち。支えてくれた皆さんのおかげ」と、白い歯をのぞかせ、感謝の気持ちを語った。

「令和3年度民謡民舞少女宮城県大会」(以下、県大会、日本民謡協会主催)は5月23日、気仙沼市のはまなすホールで開かれ、米山中2年の後藤海歩さんが初優勝を飾った。

後藤が民謡に出会ったのは小学3年のとき。旧善王寺小から引き継がれ、現在も米山東小で続く総合的な学習の時間を利用した「民謡表現体」の授業で体験したことだった。3、4年を対象にした同授業は、体験を終えた5年から新しく始める3年に引き継がれる。3年に進級した直後、上級生が披露した唄を聞いた後藤は「こんなに堂々と、大きな声で歌えるなんてすごい」と胸が高ぶるのを感じた。

5年に進級し、月2回の体験授業を終えてからも「もっと民謡を続けたい」と担任の先生に相談。体験授業で講師を務めていた衣川喜仁さん(米山町永沢・宮城県民謡道連合会会長)に弟子入りした。

週に1度、衣川さんの自宅で練習に励むようになり、さまざまな唄に挑戦していく。「自分の個性を出しながら、思い切り歌えることがすごく楽しいし、気持ちがあがります」と、民謡の魅力を説く後藤。周りに広

がる田園風景を眺めながら、思い切り声を出すことが何よりの楽しみななっていた。

初めて人前で披露したのは、地域の秋祭りのステージだった。観客からどう思われるか不安を抱えながらのデビューだったが、自分の歌を楽しそうに聞く人の姿が脳裏に焼き付いた。民謡は生活で欠かせないものとなり、一度も練習を休むことなく、実践を重ねながら徐々に実力を伸ばしていった。

令 和2年度の県大会は感染症拡大防止のため中止。後藤としても練習できない期間がありながら、中学2年となった今年、初めて大きな大会に出場した。実績のない中で不安はあったものの、大会では後藤の他、「民謡衣川会」の会員が尺八2人、三味線2人、太鼓1人としてステージに参加。背中から響くいつものメンバーの演奏が、後藤を後押しする。

県大会の演目として選んだ曲は宮城県民謡「米節」。米を称える祝い唄風の歌詞が特徴の民謡だ。「民謡は歌詞の情景をイメージすることが大事」という衣川さんの教えを思い出し、普段の練習で目の前に広がっていた米山の田園風景を思い、気持ちを唄に込めた。

「所々声が裏返ってしまっただけど、堂々と歌えた」と大会を振り返った後藤が、優勝という最高の結果を残し、全国大会への出場を決めた。衣川

さんは「教え始めたころに比べると本当に上手くなった。曲を自分のものにしてきているし、何よりも唄に迫力があつた」と、教え子の快挙を手放しで褒めた。また、

県大会から1カ月半が過ぎ、「令和3年度民謡民舞少女全国大会」が7月4日、品川区総合区民会館きゅりあんで開かれた。

宮城県代表として臨んだ後藤だったが、「聞いたことのない音程を取るのが難しそうな唄を披露する人や自ら楽器を演奏しながら歌う人など、レベルの高さを感じた」と、全国の舞台での入賞を逃す。それでも、「全国レベルの唄が聞けてとても勉強になった。来年はこの舞台で入賞したい」と前を向く。母の美和さんは「人前に出ることがあまり得意ではなかった娘が、民謡を始めてから積極的になった。娘の抛り所となった民謡衣川会をはじめ、さまざまな発表の機会を与えてくれた地域の皆さんに感謝しかない」と、結果以上に娘の成長を喜んだ。

大 会の演目として選んだ「米節」とは嘘よ 辛抱する木に金が成る」という歌詞がある。「努力する人は報われる」といった意味のこの歌詞が、後藤の一番のお気に入り。全国での入賞を目標に再びスタートを切る後藤。日々積み重ねられていく努力が、次の全国大会で大きな実りを付ける。



民謡の練習に励む後藤と民謡衣川会の皆さん